

夢の解剖——演出のためのノート

ルカ・ヴェジエッティ



撮影：堀哲平

能は驚くべき深みと複雑さをそなえた芸術である。

それゆえに普遍的な芸術の高みにそびえ立っている。能を成立させている構成部分のそれぞれに価値があり、と同時にそれらの部分が互いに支え合うという構造があって、それが能の独自性となっている。だが、本質はどこにあるのだろうか。能の形式そのものを超えていくような、ただひとつの要素とは何なのだろうか。能では、鼓動がゆっくりと静まるほどに観る者が釘付けになるが、どうしてそんなことが可能なのか。

答えることができないまま、私はそれらの問いに導かれ、何年ものあいだ能という演劇の伝統に興味を持ち、学びつづけてきた。そしてついには、すばらしい能楽師の方々と接する貴重な機会にも恵まれたのである。能における謡の言葉は実に荘厳である。しかし、というべきか、それゆえに、なのかもしれないが、能とはその真髓において、演ずる者の身体が体现する芸術、つまりすべての出演者のわがが縊り合わせられる芸術なのだろうと思う。パフォーマンスそれ自体が芸術なのだ。私にはそう見える。

「夢の解剖」は、世田谷美術館とその建築のために構想されたプロジェクトである。

そこに能を置いてみせるなかで、芸術の新たな道を拓くような演劇的時空を発生させることになるだろう。今回は「猩々乱」という特定の演目を美術館のエントランス空間に招き入れ、整える。そのように能と出逢うことで空間それ自体が変容することがいかに重大かを示しつつ、この空間の秘める輝かしさを引き出したいのである。エントランスを「解剖」というこの作業を、能の構造を司る多様な関係の網へと接続してくれるのは、照明である。能における空間や響きという変数が、世田谷美術館のエントランスというより大きなうつつに投げ入れられ、照らし出されることになる。

劇場や美術館にはさまざまな形態があり、実際の空間もさまざまだが、そのどちらも、我々の感覚や想像力が多様なレベルで働くようにしてくれる場である。ただ、その方式は通常かなり異なる。ひとつは美術館で経験するような、ゆったりと気ままに、そしてたいていの場合独りで作品と向き合うような方法である。もうひとつは劇場で経験するような、観客が集団として一点に引き込まれている集中状態というものだ。「夢の解剖」では、美術と演劇という全く対照的な性質の芸術のありように何か共通の土台があるのかどうか、また両者を取り巻く観客のエネルギーに共通するものがあるのかどうかを探ることにもなるだろう。

これは能を媒介にすることでいっそう意義深くなる試みである。能というパフォーマンスを観るには極度の集中を要し、またその結果として時間が伸縮する感覚が生まれる。能では演者はほんの数歩で数世紀もの時間を召喚し、ふたつの詞章のあいだのひと呼吸が、時には舞いの全体にわたって続くかのようなことも起こるのだ。